

つがるの昔っこ (昔話) 14

# 蛇の嫁コ (標準語)



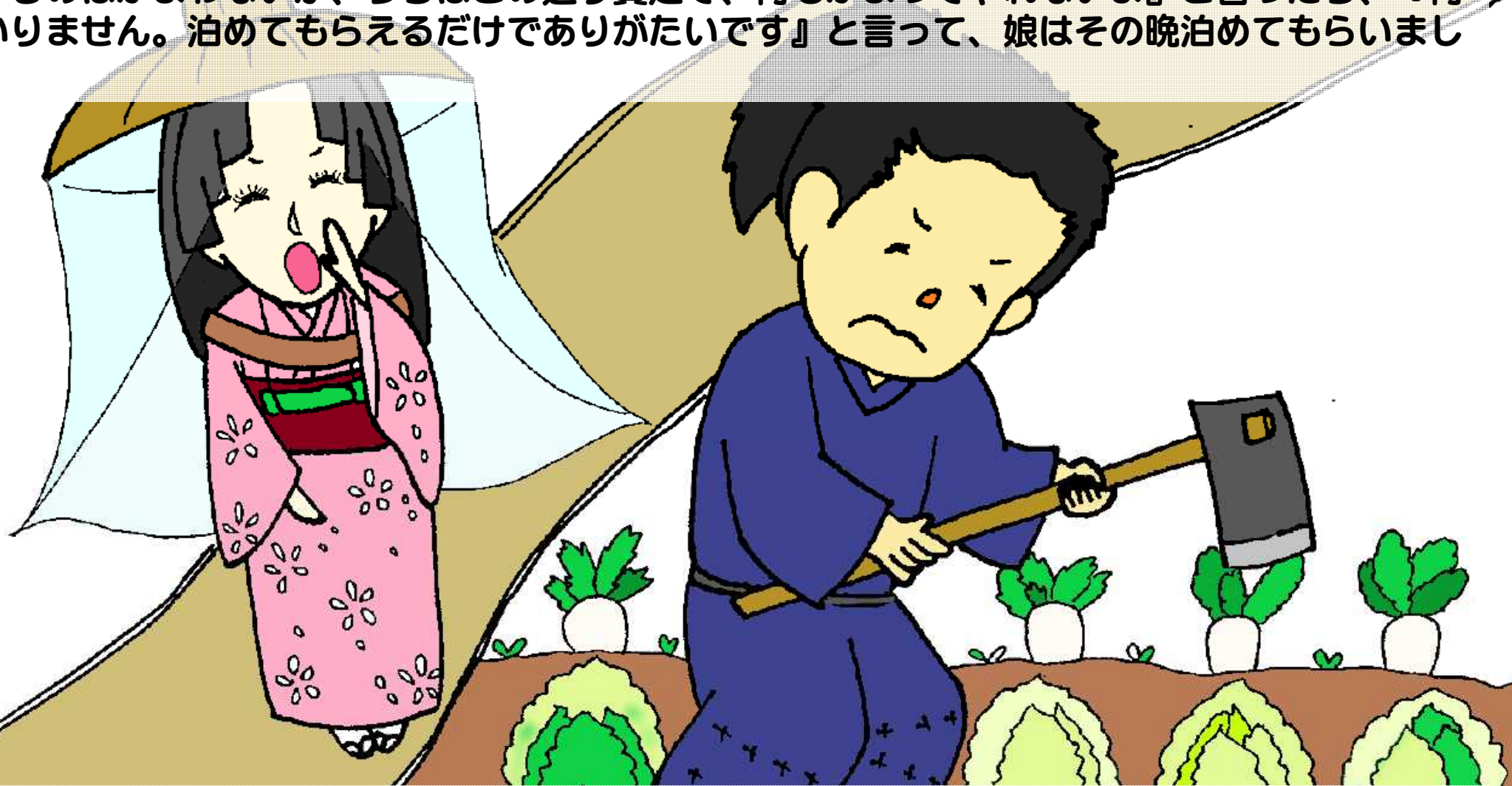
国土交通省 東北地方整備局  
岩木川ダム統合管理事務所  
イラスト：やざわ ゆな  
カラーリング：つしま けいこ




昔、ある村に一人の若者が居ました。この若者はなかなかの働き者でしたが貧乏なので、誰も嫁にくる者がいませんでした。ある日、若者は山に焚く木を切りに行きました。

そうしたら、一匹の白い蛇が岩の間にはさまって、もがいていました。『あらあら、かわいそうに、転がってきた岩にはさまれたんだな。どらどら』と、岩をどかして蛇を出してやりました。『どこも怪我無かったかい。それなら良かったね、さあ、山に帰りな、今度は気をつけて行きなさい』と、放してやりました。

それから何日かしたある日の事です。若者が畑を耕していたら、一人の色の白い可愛い娘が急に  
来て、『私は旅の途中の者ですが、疲れてしまったので、何とか一晩泊めてください』若者は『泊  
めてやるのはかまわないが、うちはこの通り貧乏で、何もかまってやれないよ』と言ったら、『何  
にもいりません。泊めてもらえるだけでありがたいです』と言って、娘はその晩泊めてもらいまし  
た。



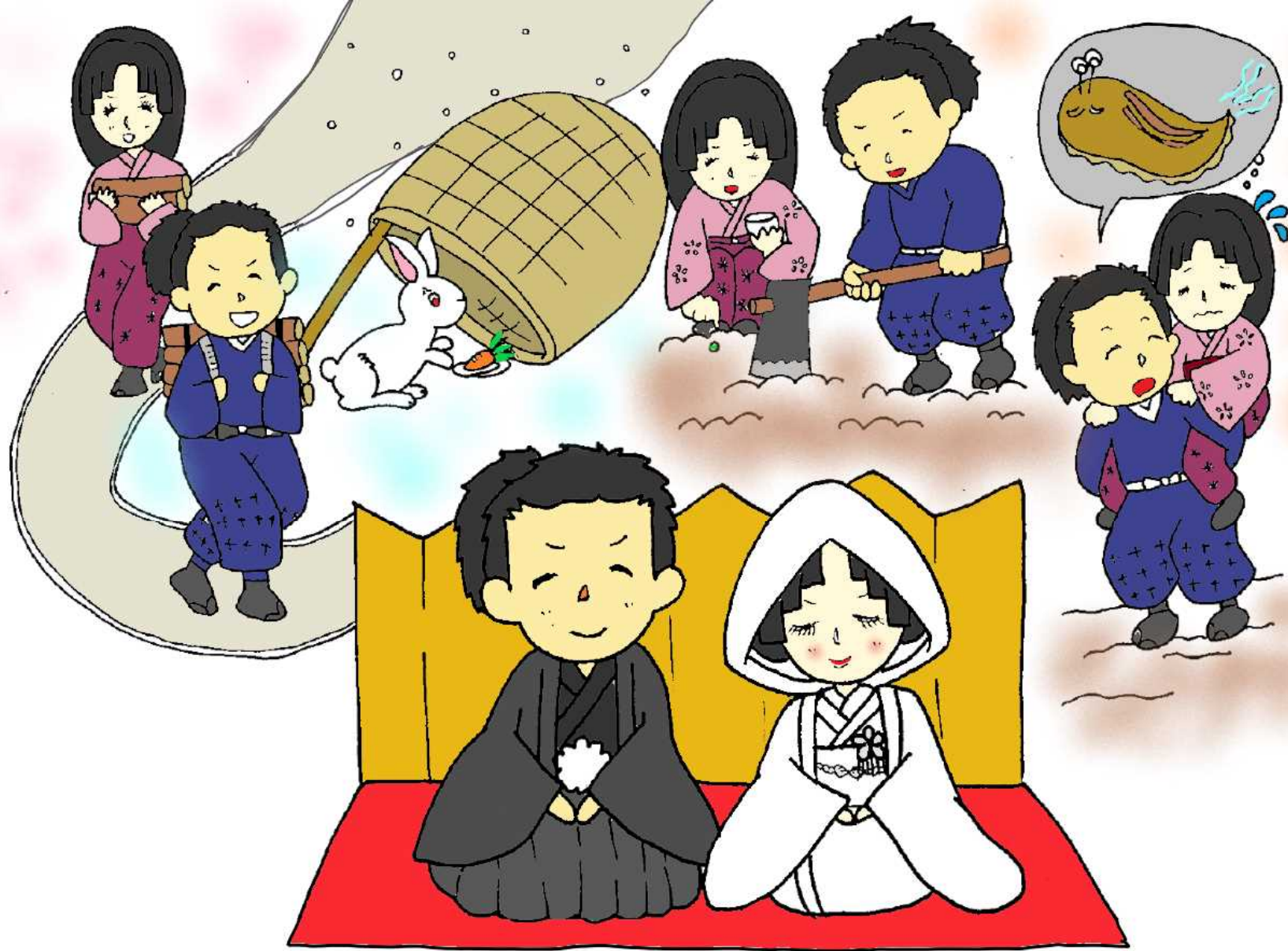
次の日、若者が起きると昨日の娘はとっくに起きていて、ご飯の仕度がしてあり、若者に食べさ  
せました。一人者の若者が今まで食べたことがない旨いご飯でした。『わあ、旨い。なんとも旨い  
な』と喜んで食べたら、娘は嬉しそうにニコッと笑って『じゃー、晩もまた忝えるからね』と言  
いました。『お前さん、旅に行かなくてもいいのかい』と聞いたら、『いいんです、少し訳があるの  
で、私をここに置いてくれませんか』



『いくら居ても良いけど、うちはこんなに貧乏だから、朝から晩まで稼がないといけないので、あなたみたいな娘はとてもとまらないよ』  
『私も働くのが好きだから』って、娘はここで若者と一緒に暮らすことになりました。

なるほど、この娘は朝から晩までてきぱきと元気に働きます。特に若者と一緒に山に山菜とりに行けば、『ワラビはあっちの林の方にあると思う』『タケノコだとこっちの山に沢山あると思う』と言って、そっちに行くと本当に、びっくりするほど山菜がありました。

『山歩きなら俺が一番だと思っていたが、お前には、かなわないよ』と若者は感心しました。娘は『あらやだ』って恥ずかしそうにニコッと笑うだけでした。



一月過ぎ、二月過ぎて、そして二人は夫婦になりました。毎日朝早くから晩まで汗流して働いて、それでも二人は倅せでした。畑耕して、山に木を伐りに行って、雪降れば時々罾掛けに行つて兎を獲つてきて、兎汁作つて食べました。『ああ、旨い』と言つて、嫁は兎汁が大変好きでした。春になれば又二人で山菜とりに行きました。ところが、嫁はナメクジが大嫌いでした。ナメクジを見ると顔を真っ青にして、足がすくんで動けなくなりました。『山が好きなお前でもこわいものあるんだな』と笑つて、若者はその度に嫁を背負つて家に帰りました。

この嫁のおかげで、若者の家は、だんだん裕福になっていきました。そうしているうちに、嫁は赤ん坊を産みました。二人は大変可愛がってこの赤子を育てました。ある日のこと、若者は山に仕事に出かけましたが、途中で忘れ物に気づいて家に戻ってきました。そして、赤子どうしているかとのぞいてみると大変驚きました。



一匹の大きな白い蛇が赤子の入っている籠をぐるっと抱くように巻いて、二人スヤスヤと気持ち良く眠っていました。それを見た若者は『あっ』と気付きました。『そうかい、お前はあの時、俺が助けてやったあの蛇だったのか。どうりで兎の肉好きだったり、ナメクジ嫌いなわけだ』って、一人でつぶやき、そっとそこを離れ、又山に行きました。

夕方、若者が家に戻ってきたら、嫁の姿がどこにもありませんでした。ニコニコ笑っている赤子の箱に一枚の紙きれはさんであり、それを見ると、『私は、あなたに助けられた蛇です。このまま、この家であなたといつまでも暮らしたかったのですが、私の正体を見られたからには、もうこの家にいる事はできません。あなたと暮らして私はとても幸せでした。赤ん坊が握っている玉は、私の片方の目玉です。これをしゃぶらせて育ててください』と、書いてありました。

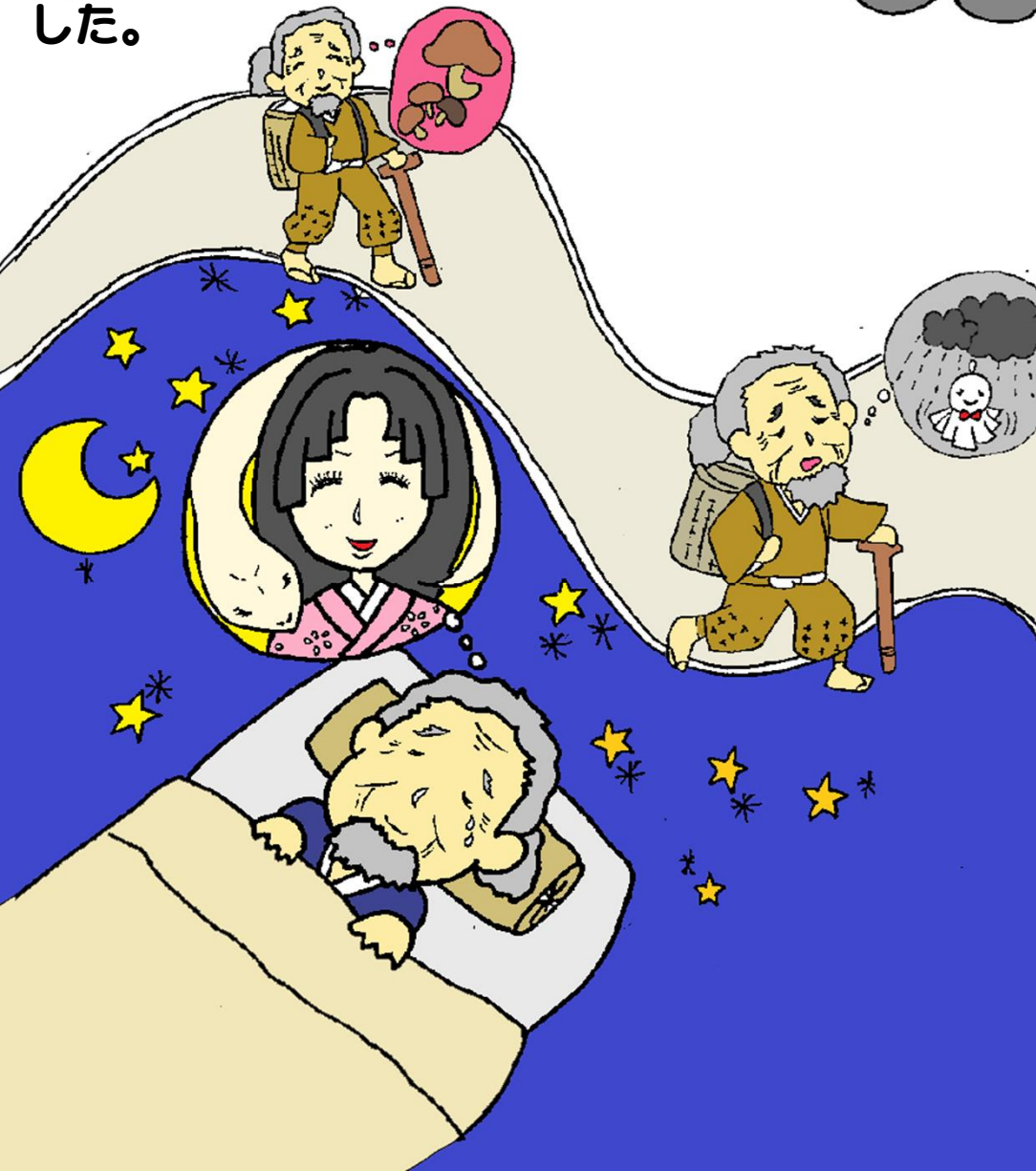
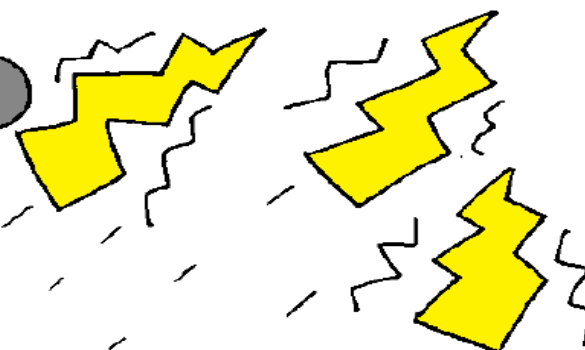
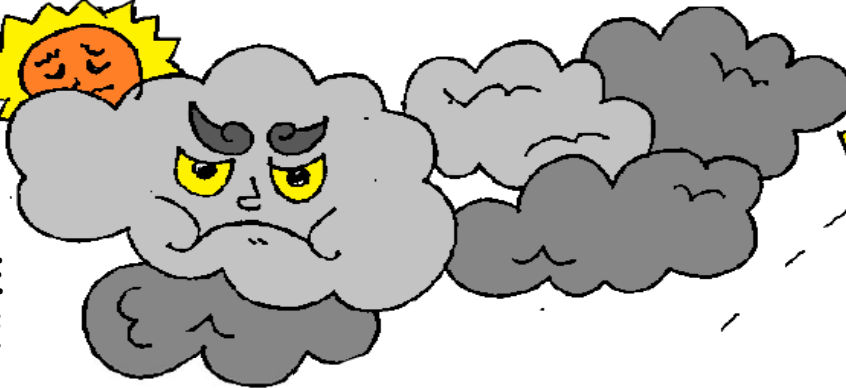


赤ん坊はその玉をしゃぶりながら大きくなりました。父親に負けないくらい立派な若者になって、せっせと稼ぐのでますます裕福になり、いい娘を嫁にもらって、みんなで幸せに暮らしていました。





今は爺様になってしまった若者は、もう何も働かなくても良いのですが、毎晩、山に帰って行った白い蛇の嫁の夢を見ました。無性に会いたくてたまらなくなっていました。



ある秋のカラッと晴れた日に、『今日は天気が良いので茸でもとってくるかな』と、爺様が籠を背負って山に出かけました。その日は茸がおもしろいほど生えていて、爺様は茸につられて知らないうちに山の奥へ奥へと入って行きました。

昔から『女心と秋の空』と言います。(変わりやすいという事です)朝、家を出るときは、あれほどカラッと晴れていた空でしたが、雲がムクムクと出てきたと思ったら、ガラガラと雷が鳴りザザーッと空が空(から)になるような雨が降ってきました。『あらあら、あらあら』爺様はどこかに雨宿りする所がないかと思い、周りを見渡すと、丁度良い具合にそこに洞窟がありました。爺様はそこに駆け込み雨宿りをしました。







ズーツと雨宿りをしていたら、女心だから・あんなに降っていた雨は嘘のようにあがり、爺様は『さあ、行こうかな』と思い、後ろに置いた箆を取ろうとしたら、洞窟のズーツと奥の方に白く光っているものがありました。



『あれ、何か』と思い近づいて行ってみたら、白く光っているものは、一匹の蛇でした。爺様はどきっとしてよく見たら、もうその蛇は死んでいました。そばに寄り抱き上げてみたら、その蛇は片方の目がありませんでした。爺様はハット気付いて、『あー、お前だな、お前だな。』ボロボロ、ボロボロと涙を流して、体を抱きしめて爺様は泣きました。お腹から声を絞り出すようにして泣きました。

爺様は遅くなってから家に戻ってきました。家の人達はみんな心配していたところに爺様に戻ったので、ほっとしました。『おじいさん、どうしたの？何かあったの？』と、皆が聞いても、『何でもない、何でもない』って言って床に行って寝ました。



次の日の朝、いつもなら早起きの爺様がいつまでも起きてきません。『おじいさん、どうしたんだろう』『夕べ、遅くまで山歩きたんで疲れたんだろう、もう少し寝かせておこう』皆でご飯食べた後も、まだ起きてこないの、兄と嫁が見に行きました。



爺様が亡くなっていました。懐の中に白い蛇を抱いて、眠るようにして爺様が亡くなっていました。倅せそうな顔でありました。二人で仲良く天に昇っていったことでしょう。

おしまい